

【質疑応答】

質問者 1：パーク内のバリアの発見はどのように行っているのか。

講師：毎年、障害当事者にご来園いただき、確認作業を行っている。

質問者 1：どのような障害当事者が確認作業を行っているか。

講師：決まってはいるが、初めての方とリピーターの両方をお願いしている。

質問者 2：年々、来園者が増加しているが、これからも安泰なのか。

講師：これからは人口減少社会のなかで海外からのゲストをいかに呼び込むかが課題となる。また、リピーターも多いため、アトラクションやプログラムのアレンジを加えていかなければならない。さらに、高齢社会を迎えて高齢者が楽しめるパークづくりが必要になっている。

質問者 3：パーク内で取り組んでいる内容を交通機関等に応用できないか。

講師：具体的に何が応用できるかわからないが、我々の取組みのほとんどは素人が行っていることである。要は、専門家やお金をかけることがすべてではない。

質問者 4：これからも問題は生まれるのか。

講師：問題があるのは当たり前。問題に取り組んでいくことが、次につながっていくのではないか。

質問者 5：酸素携帯者などの対応ルールなどは具体的に準備されているのか。

講師：対応マニュアルはあるが、酸素携帯者など詳細な対応ルールは決まっていない。その場のキャストの判断で対応している。ただし、ご本人にも自己責任を負っていただいている。

質問者 6：複数の車椅子利用者への対応はどのように行っているのか。

講師：パーク内には、常に車椅子利用者のゲストはご来園されていて、アトラクションなどで重複することもあるが、できる限りゲストの条件に沿う対応を行うようにしている。

質問者 7：ゲストへの素敵な対応をするキャストはどのように教育しているのか。

講師：ゲスト同様にキャストも変化している。組織的な教育を行ったうえで、個人で判断ができるようにしている。キャストが迷わず対応出来るのは「言っているコトとやっているコト差の無いパーク運営」がポイントだと思っている。

質問者 8：ソフト面のバリアフリー化のポイントはありますか。

講師：非常時の対応ができることが重要だと考えている。常に最悪の場合を想定し、対応することとしている。

質問者 9：キャストの手話への取組みを教えてください。

講師：手話もパフォーマンスの一つとなるため、キャストのモチベーションとなっている。また、同僚のキャストがゲストと手話で会話するところを目の当たりすることがあるため、常に手話を学ぼうとするキャストがいる。

質問者 10：知りたいことはなんでも教えてくれるので、とても安心感がある。どのような情報教育があるのか。

講師：すべてのアトラクションには、ストーリーなど詳細な設定が存在し冊子としてまとめられている。それらを熟知することで、ゲストへのきめ細かい情報提供ができるものと考えている。

以上